

に対してかしくも大元帥陛下からご嘉賞をいただいた。将兵は感激にひたった。

思えば霸王城を突破以来すでに三カ月を経過し、多くの戦友を失った河南作戦はついに終わったのだ。ご嘉賞もさることながら、将兵達は生き残ったという喜びもまたひとしおであった。

## 晋察冀辺区作戦記

愛知県 小澤 准 平

昭和十六（一九四一）年八月八日、駐蒙軍下第二十六師団管下歩兵第十二連隊にて、一期教育を終了し、第一年度下士官候補教育隊として連隊本部通信所で教育勤務をしていた時、方面軍作戦として晋察冀辺区共産軍の徹底撲滅を期した作戦命令が我が中隊に伝達される。初めてのことなので勇躍して待機した。出動は十日未明という。出発に先立ち弾薬一人一二〇発、米三分、乾パン二日分、若干の着替えの衣料、靴下な

どが支給され、それに靴の悪い程度を檢了し、準備万端終えて出発を待つ。

蒙古の夏はまたひとしお厳しい。出動の十日は明けの三時、戦友の田口、鈴木と飯上げに行く。電信所は例により別分配で、三人で持ち帰り、電信所員十八人で最後の連隊内の食事をする。返納するバックを若干の居残り者に依頼す。五時過ぎ、戦友の待つ中隊に急ぐ。野田班長がもう、あのひげ、頭髮を落して清々と立っている。土屋兵長の引率で野田班長に敬礼す。中隊兵舎では、はやくも当指揮官大西健吾中尉が軍装に身を固めて佐藤修准尉と話し合っている。

通信隊長は本作戦間は連隊副官として軍の指揮に当たるため、大西中尉が代理通信隊長になる。駄馬隊は二日前出発したので今日は自動車で目的地まで行く。工程は一日、本部前にはすでに山下部隊の自動車（トラック）が幾十台か列んでいる。

五号機四個、師団通信一個分隊と指揮班、技術員と総員約一〇〇人、通信隊総出陣である。やがて整列を終え、五分前に中隊長代理大西中尉より、「当作戦中

は大西中尉が指揮を執る」と、そして今次作戦の目的、工程、方面を説明、終わって軍靴の音も勇ましく部隊本部へ行進する。残留部隊は佐藤准尉の指揮で「頭、右っ！」と我々を見送る。

携帯品は相当に重く、本部に着く頃は既に肩に食い込む。到着して一時荷物を下ろして休む。あらかじめ命令のごとく、わが隊は四番車と五、七号車、自分は四番車のシボレーに乗る。七時四十分全員乗車完了。

器材を中央部に置いて、見送りの戦友に挨拶をする。やがて部隊長坂本吉太郎大佐が、金色輝く本部の玄関から現れ、一番車の貨物兼乗用車の二段車に乗車する。出陣式は九日に執行済み。留守隊司令官熊崎中佐以下、正門より一列横隊に本部方向に並ぶ頃、ようやく時計は八時を指す。

部隊副官（通信隊長笛田大尉）の号令一声、部隊長車が静寂を破って出発。各車は十メートル間隔で出発する。我々は四番車であるが十一番目を走り始めた。

残留将兵と兵營に見送られ、正門から左折して左方に燦然と輝く菊花紋章に敬礼を送り、一生に再び巡り

こない感激を胸に出動した。百メートル過ぎて部隊は東南角のトーチカを過ぎて右折す。

車列は一路目的地へと八十キロのスピードで進む。

大同市城壁、北門、第一外門を抜けて、山下部隊前から射撃場を横断し、大内江を渡る。道がそろそろ凸凹になり、バウンドで兵は車から飛び上がる。あまり楽なものではない。

車の巻き上げる土塵は我々の顔に無情に付着する。

マスクをかけるよう命令あり、十一時四十分頃、渾源市に着き、第一回の休憩と食事を行う。ここで他部隊との合流も行われたらしい。食事は朝、部隊で詰めた麦飯とニシンの煮付けで、ほかに二人に一個の鯛の缶詰で舌鼓を打つ。自動車隊はこの間、愛車の手入れを終えてから食事をとる。自動車隊の食事の終わる頃は他の者はしばらくの休憩である。

ここ渾源市は、我が部隊の第二大隊本部のある所で、付近一带は治安も行き届いており、市民や子供が我々の食べ残りを求めて大勢来る。

一時間の大打止は終わり、再びエンジンはうなる。

先頭車が砂塵を蹴立てているから動いているらしい……と、次々と車が動く。渾源市を後にして市の南西部を市街に入って過ぎ行く。入る時には城門のあったのが、今度出る方向には無い。数分後車は急傾斜を攀登<sup>よじのぼ</sup>り、苦しうなりに立てて進む。もう民家は無く徐々に敵共産匪の巢窟間近なりとの感がある。

ようやく今までの広漠たる大平原は尽きて、絶壁のごとき岩山に入る。標高三四百メートルの山の屹立する谷あいの溪谷の、川縁に少し高めに自動車路が作つてある。よくこんな工事をしたものと今更ながら先輩将兵に感謝しつつ車上で揺れている。

ボディが切り崩した道の側崖にすれて、危なくて手足など出してはいられない。一人が後に続く車が続行して来ないと告げた。見れば我々の車の後で編隊が切れている。直ちに運転手に知らせると、車は止まった。後ろの車はニッサン型で力がなく、乗っている者に手伝わせてようやく続行して来た。こうした事が幾度かあった。我々は車の上だが兵隊は後の車が途切れ

る度に後方に走って誘導して来るから、この峻峻な道路越えは苦勞だった。

自動車は、あるいは石道を踏み、あるいは川の中に飛沫を飛ばして走る。最先頭の車輪跡を踏んで走り続ける。軽快に走る時、いつしか我々は車上の揺れに夢路に落ちる。

ハッと目覚めた。車は走る。山間に畑があり、粟やトウモロコシがあり、珍しいのはアヘンの木が植えてあった。この辺りは川とはいえ山に少し遠く、民家とおぼしき跡がある川の右岸や左岸を道路のあるままに走る。

午後三時頃、極端な坂にかかった。どの車もどの車も次々に車上の兵隊が降りて後押ししては前進する。樹木なき山野を望見して車が行くと、今まで走って来た川が細くなり、分水嶺となるので再び車は山に登り始めた。あまり急斜面でないので後押ししなくてもいいらしい。

左方頂上に電信所が見える。二年兵に聞くと、ここ

がかの昭和十五年三月に、我が部隊分遣の通信隊を含む一小隊と、ここから三十キロ先の南波頭の一個中隊が共産軍の襲撃を受け全滅した狂風嶺であるという。山の頂上でちょっと休止すると、中隊の兵が二人挨拶に来た。皆元気で任務に精励しているとの事。ここにも別れて、今度は下りである。急な下り坂である。前作戦中に、この一角から、一車両墜落して死傷者を出したそう。最後に降りた所に、欄干のある見事な橋がある。ここから急角度の左折である。これらの曲折道を運転手は必至にハンドルとブレーキを操っている。天祐が一車両の故障もなく編隊は続行する。

また川に出た。この辺りは、川の中に水のない部分を選んで自動車の幅だけ丁寧に石が並べてある。川幅は五六〇メートル、一時間ちょっと過ぎて南波頭に着いた。

第一中隊井上隊である。あの日の襲撃の跡もなく、ここが三十メートルほどの丘に兵舎があり垣根がある。この車の戦友は、同年兵の田口、鈴木静男で他は二・三年兵である。ここで小休止。ちょうどテントの

側で我々の車が止まったが、その時もう坂本部隊長が笹田副官、野田部隊軍医主任、玉井中尉その他高級幹部が休んで、井上隊差し出しのサイダーにようかんを食べていた。我々兵隊は茶だけで、ちょっと情けなく思ったが仕方ない。

最後尾車が到着して数分後出発になった。その間、七月末まで約二カ月間（一期の間は助手）連隊本部通信所勤務を共にした堀部正喜上等兵が来て、井上隊通信員の様子を聞く。

部隊はなお整然と進軍中である。日はようやく西方に落ちんとし、余光を右方の山嶺に投げている。風に立った黄塵の空は、呼んで腫であるのも心は変わらないが、自分は今、蒙古にいるのだ、また、ソ連に対してはこの辺は満州と並んでやはり第一線であると感じ、一段と我等は重責を思った。

南波頭を出てから、車両分隊二番車が故障のため、我々の車は編隊の最後尾となっていた。そのため、この辺りの桃林に目をつけた車の下士官が、遅れたのを

幸いに車を止め、全員一目散に桃畑に突入して、桃を持てるだけ持って来た。喉の乾いた時とて、実にウマイ！ たて続けに食べて、自分はハッと気がついた。六月以来の下痢がまだ全治していないことを、他にも自分と同様の者が若干名いたが……困ったと思ったが仕方ない。

車は大きく曲がって左方に行く。川幅二〇〇メートル位の所に出た。遠見はもうできないほどの薄暮となる。

右岸前方の左岸十メートルあまりに三、四台の車が止まって兵が降りている。どうやら河川横断中に軟部に車輪を食い込ませたらしい。我々の車両はそれをよけて少し上流から難なく突破した。

前方の集団は部隊であった。ここは王居村の部落で自動車による進軍はここまで、この先は山岳で徒歩行軍となるらしい。各部隊が荷物を降ろして混雑しており、後続の我々の車も停車した。自動車はここから直ちに折り返して夜間帰途につく。

先着の駄馬隊員が来て荷物を分け合って案内者に続

く。ここは相当に大きな部落である。民家の間を抜けて立派な門を入れて、右に、左に曲がった所に、ローソクの淡い火がついた家があった。右の方にローズ馬が二頭と軍馬が四頭、家の中には先着の兵が五、六人語り合っている、どうやら炊事中らしい。左方の三間ある家に東から中尉、我々雑兵、下士官と眠ることになる。荷物を早速片付け、休むと言ひより、明日の出発の準備に追われる。大西中尉の部屋の前に我が隊長の愛馬がいる。堂々たる体軀である。高木喬兵長は機材の点検をやっている。我々は指揮班であるが、幹候の伊藤と田口・鈴木・自分の三下士候と分隊長として土屋正一兵長、電気工の高木兵長他に二、三人がこの部屋で寝るらしい。

やがて二時間もした八時頃、食事である。土屋兵長ほか分隊長、下士官の当番を指名された。今後は当番兵として身の回りを見てやらねばならない。田口は富田軍曹、井戸が野田軍曹、鈴木が副島伍長、自分は山口一夫伍長であった。先着糧秣係の中村軍曹を自分が兼ねてやることになった。当夜、中村軍曹は熱発で明

日からは糧秣係を副島伍長がやることになった。やがて食事も終わり、明日の準備に米を用意して釜に入れ、朝すぐ炊くことの出来るようにした。馬に水をやり、終わった頃、熱発の中村軍曹の看護のため水を汲んできて冷やしてやる。両親にもした事がないのに軍隊では仕方ない。飯盒を洗って、ようやく十時頃寝ることになる。しかし不寝番がある。当然である。

この頃、ようかんが二本、サイダー一本、朝鮮専売局の十五本入り煙草三箱が加給品として渡った。のまない鈴木から煙草をもらった。野田古参軍曹が大西中尉と打ち合わせて全員の就寝を告げた。富田軍曹は命令受領者で軽軍装に刀を帯びている。今受領に行っている。帰って来て出発は明朝六時半と言う。蒙古の六時半は薄暗い。戦野の夢路に入る前に便所に行く。便所として何も無い。適当な場所です済ます。空を仰げば雲一つなく晴れ渡った大空、内地にも変わらぬ星が輝いているだろう。内地でもこの同じ空を星を眺めて、八月ともあれば真夏の涼風に身体を休めているだろう

と、つくづくと郷愁に駆られずにはおれない。雑のうを枕に寝た。

四時全員起床、洗面などもちろん出来ぬ。炊事も火を燃やし、粉味噌を溶かした香りが空腹を刺す。昨日、車で食べた桃のためか妙に腹が変で、やはり下痢になった。それによろかんと言いだしては健康人といえど腹を壊す場合が多々あるのに、口当たりが良からと、それも寝る前に食べて飲んだため、見事なほどの下痢であった。今日の行軍が心配になった。

徒歩で集合所の部落の東に行く。部隊は集合していた。昨日見たより多数な兵力である。時間がたつに従い、前哨から先兵、中隊、本部となり、本部の後が我が通信隊である。ほどなく笛田副官が、夕べ我々の前にいた愛馬に乗って各隊に何事か言い、少し後から部隊長・坂本吉太郎陸軍大佐が蒙古馬に乗ってくる。小さいキリリとした栗毛で、足長な部隊長の足は地に着きそうだ。蒙古馬は他の馬に比し、最も困苦に耐えられるらしい。

七時になった。中村軍曹は熱発のため、少し休養して、やがて部隊の宿る霊邱に先行して行った。

通信隊の後から電報班八人が続き、いよいよ峻険たる陰山山脈の難行軍が始まる。負い荷は重く、肩に痛く食い込む。行く手を遮ぎる岩塊の間を抜けては抜け、砂利に岩に足を運んで行く。平常は水の流れがなく、一度雨が降ると激流となって流れるこの川が、行軍の唯一の通路である。川が細くなり、少し横道に入った。山登りである。三十度〜四十度の急斜面で、前に伏すようにして登って行く、馬も同じである、馬上の者はいない。駄兵達は生きた兵器の駄馬を懸命に操って行く。

中腹で十五分間の休憩である。四十五分行軍しては十五分間休憩する。木のない山に雑草があるのみ、他ははげ山か岩山である。中腹からはすに進むと、中腹に道らしきものがある。我が部隊は以前一回この行程を突破した経験がある。

今度は谷に入った。少しずつ水のある川に出た。少し進むと川はだんだん大きく、しかし水はない。川柳

があちこちの川縁にある。桃の木もある。火の中のごとき炎天を行き、木陰の涼しい所に出る。この間に全くホッとする。

ようやく夕もやがかかった。しかし「設営者前へ！」の命がなかなかこない。まだ一つ大きな山を越えなければならぬようだ。この頃から自分の体に異常を感じ、隊列から遅れるようになる。なんとも力が入らない。遂にどうしようもない事態になって、やむなく班長に申し出る。衛生兵に告げたが足がいよいよ重くなってくる。その時、休憩になり一部装具を軽くしてもらおう。しかしまだ重い。他の部隊からロバを一つ頭借りて、馬上にて行軍する。

その頃、前方部隊に二人の完全なる落伍者が出たので、自分はちょっと具合の良くなったことを話して歩くことにした。代わりに乗った兵は意識もなく馬上でグッタリとなっていた。それを他の戦友が引っ張って行く。自分は軽装になって勢いがついた。なるべく隊の前方に行くことにした。峠にきたとき時刻は薄暮、暗くなってきた。自分も夜の冷気に元気をとり戻し、

帯剣と銃を持って先行して行く。先ほどの峠からどれだけ降りたか、知らぬ間に河原を歩いて来た。

待ちに待った「設営者！ 前へ！」の命来る。ホッとした。とたんにまた元気になる。「止まれ！ 直ちに宿営準備」。川柳のあるちよつとした林で先着部隊のテントが見える。我が隊も設営下士官の命にて、テントも他隊のごとく張ることが出来た。

一方、若干名で飯盒に米を入れて洗って来ていた。早いものである。加給品として氷砂糖が渡された。ほどなく食事が終わり明日の準備、各自所持品は整理されて幕舎内が片付いた。食べた飯盒を洗いに行ったが洗い場は案外近い所である。

やがて就寝時間となる。時間は十二時半である。通常の四時間遅れである。あす朝の出発はなく、十四時出発と言う。そのはずである、だから準備は簡単で直ちに寝ることになる。

短時間の睡眠で不寝番となる。朝九時起床命令。十二時にテント片付けである。素早く背のうに入れる、

各人装具を点検して並べる。馬も運動を終えて、出発を待っている。今夜は夜間行軍であるらしい。下関鎮という所に敵がいると思われるための隠密行動らしい。十四時になり出発である。左に曲がって川を行く。第一回の休憩は間もなくで、このとき便所へ行く。行軍中腹を悪くするのは全く苦しい、第一休憩が出来ない。疲労も回復出来ず体の衰弱は逃れられない。この付近には高粱がたくさん作っており、クリー（苦力）達は食物は十分でないらしいから、これらトウモロコシを兵隊の荷物ぐらい持って行く。川と畑の間を行く、第一日先行したらしい歩兵部隊が一個中隊、我らの前進を見ていた。

今の部隊の尽きる頃、曲折した山路を登ることになる。川は左に大きく曲がり、そして山陰に没している。登りから斜に降り、畑を越え、岩山を踏んで、どんどんと軍は進んだ。幾度休憩したか。昨夕渡された氷砂糖もこの間に腹に入れた。敵を求めて歩きに歩く、休憩の煙草が、いまだかつてない甘いものにな



る。あまり強行軍ではない。しかし、日が西山に入らんとする頃、食事を兼ねて夜間行軍の準備の一時間はどの大休止がある。

大休止には、駄馬部隊は馬の荷物をおろしてやり、足をソッコウと言って放っておくと固くなるそうで、その予防に一苦勞して、水を飲ませ、そしてトウモロコシなど切り取って与える。まず、これだけをせねばならん、駄馬隊は何はともかく馬を大切に作る。生きた兵器として、山岳野戦には欠くべからざるものがある。

大休止後出発する。馬にも夜間標識がつけられ、各自背中にも白布をつけて歩く。

いつのまにか夕闇は下りて、前を行く兵の姿も薄もやのごとくぼーとしている。ただ前の白い標識を見ての行軍である。二・三年兵は時々話をしているが、敵地侵入は初めてである新兵の我々は、ただ黙々と進んで行く。

現在の地形は音響から判断すると、左手は竹やぶのようで、その先の流れの音は川らしい。あまり水量は

なさそうである。右手十メートルほどは畑で、その先が山である。サラサラと木のすり合う音が聞こえる。砲弾の音はまだ聞こえぬ。北支の夜は涼しい。汗などは少しも出ない。

六キロ程度の行軍であつたらう、今度は石の多い所となつて歩きにくい、例のごとく分水嶺へ登っているらしい。前の戦友にどーんと突き当たつて、見ると前進がなかなか困難らしい。人は良いが馬が大変で操つる兵は必死で進ませる。電灯は許されず、止まった兵は手の中で煙草をのむ者もいる。標識が大きく動く立ち上がつてまた歩いて行く。

下りになった。二〇〇メートルも行ったとき、通信隊直属の師団通信が止まった。「土屋分隊！通信所直に開設、全友軍に連絡をつけよ」と大西隊長の命令が発せられる。我が分隊はすぐに行軍の戦列から離れて、適当な場所を探す。分隊長の「開設！」の命令一下訓練で鍛えた迅速な手さばきで見ると間に連絡開始、「感度あり……」隊長に報告のため鈴木が走る。自分

は発電機取っ手を回転して発信の任務に就く。隊長は交互前進を指令した。

この位置で十分間を我が分隊が連絡に従事するうちに、別に前進した原田分隊から通信所開設の連絡あり。我が土屋分隊は原田分隊に通信任務を移管して、ただちに撤収、分荷搬送の部隊を追って急行軍に移る。この急行軍で自分が入隊前、名古屋市の広小路通り平野時計店で買った腕時計を落としてしまった。

時は過ぎて拂曉近く、辺りがぼんやり見える頃、突然前方にけたたましく銃声が轟いた。作戦初の砲火に緊張し停止し、一隊の中で見守っていた。

先遣隊が共産匪を追撃していると、伝令が伝えた。三十分ほど、停止していると、銃声はやみ、部隊は徐々に前進し始めた。視界は全く明るくなって、良く見えてきた。林道を見通す右側に、水量も多くなった川が見え隠れに見える。部隊はその川へ右折して下りて行く、この部落は何と云うか知らないが、だいぶ多くの民家があるようだ。やがて命令受領者の召集で、

この付近を今日一日掃討して宿泊することとなる。

非戦闘員たる通信隊員は、機材の点検やら軍馬の保護に終日過ごしたが、小銃隊はすぐ分散して出勤しているらしい。空にはまったく雲一つなく天気は良い、気候も八月とはいえ、盛夏を過ぎた蒙古は過ごしやすい。仮宿営地の整備も終わり、通信装置は完全にして大隊間の連絡を保持している。給水班は川水をろ過して飲料水の確保である。昼食のため水をくみに行く……きれいにろ過された水をくんで、乾いたのどを潤す。

午後二時頃、討伐隊が帰って来たらしい。早目の就寝が命ぜられて、不寝番も決まって寝た。緊張した夜ではあったが、事なくすんで明けた。八時、出発である。

山、また山の続く北支に行軍は避けることは出来ない。今日も一日中歩いた。日没間近か……行軍の疲れが始まる。「設営隊！ 前へ」の号令の出るのを待ちつつ疲れた足に励みをつけては行軍は続く。日はとっぶり暮れた。「設営隊、前へ！」ようやく待ちに

待った命令が出る。辺りの地形は暗くてサッパリ分らない。副島警設営隊長（伍長）が部下を督励したためか、もう設営は大体完了。本隊は到着後、ただちに天幕を張るだけである。たちまち宿舍が出来上がった。初年兵の自分達は例のごとく水くみ、馬の手入れなどで、この時とばかりに働かされる。けれどこの場合は楽しい。

明けて、一小隊が残留して、ここ上塞鎮を後に下関鎮に向かうこととなる。翌朝、九時出発、昨夕左折した所まで引き返し、昨日の行進前方に向かって再び動きだした。三日間続いた行軍、野営は、今日の行軍において最も苦しさを増した。川を渡り、河原を歩き、膝下はずぶ濡れ、そして水中渡河、全く往生である。

その日も暮れて、下関鎮に着く。先着の設営隊が、川から段々畑になった高梁畑の中に準備して待っていた。例の通りの天幕張りで、まず人の寝る場所を作り、駄馬は急造の馬繋ぎ場を用意し、初年兵は早速疲れにかまわず馬を下段の方の川に連れて下り、ソッコ

ウと水やりをする。大体、設営から完了までは二時間を要したものだ。

消灯後、十時〜十一時の一時間が二番手の不寝番である。その勤務を終えて、疲れた体をたった一枚の毛布に身をくるんで、うとうとしたとたん、慌たらしい「起床！」の連呼に起される。炊事班よりはまだ、ましか。食事は炊事係で既に出来上がっている。

正午過ぎ、急に天候が崩れ、雷鳴とともに豪雨に見舞われた。北前方に東から流れ、西に通じるものと昨日行軍の川とが丁字型になっていることが、今朝分かった。雨なく水のない時は、全く干上がったようなその川も、突如の豪雨でたちまち一大濁流と化し、ものすごい音をたてて流れ始め、川を隔てて部隊は二分された。

そこで我々が天幕の中から見ていると、工兵隊が爆破薬をもって付近に立ち並ぶ。大きな木を倒して、見る間に急造とはいえ、人馬の通れる橋を作っていた。秋の蒙古は暮れるに早く、休息していると行軍の時と違って早く日暮れとなる。明けてどこに行くか。我

が部隊は昨日進んで来た方向を左折して、北西に進み始めた。左側にまた川がある。トウモロコシと高粱の畑の中を進むが、一向に敵影も無く、何のための作戦か、少々疑ってもみたくらいだ。およそ一時間も進出した頃、堀部上等兵が腹痛を訴えて後部で横転していると、衛生兵が二人急いで走り去って行った。報告によるとどうやら盲腸炎が急におきたようだ。戦場では何の設備もない、それも行軍中にかかる病気は、一休軍医はどう処置するものか、他人事ながら気にかかる。軍は予定通り進んでいる。一時押さえの注射でもして担架送りにするかどうかやら行軍に支障なく治まったそうである。

川幅も縮まってきて、畑の行軍も出来ず、尖兵も川端の崖を歩く始末で、部隊は川を横切ったり、河原を歩いたり、膝下は完全に濡れてきた。

ちょうど、進行方向左にやや曲がる付近で突然左右の山から銃声がけたたましく響いてきた。砲撃を受けたのはこれが最初である。幸い、負傷者はない模様である。

ある。二百メートルくらい後方の我が軍の重機関銃が一機火を噴き始めた。どこから敵が撃ってきたか、我々には分からないが機関銃は左岸遙か峰の付近へ照準して撃ち続けており、土煙が起きている。十分ほど応戦したが、敵はその後攻撃してこないで、軍は隊列を復元して今まで通り静かな行軍となった。敵將、焰錫山の寓居が左手山の中腹にある。それからは何事もなく、目的地の霊邱にどんと進む。

日がようやく午後の日差しになる頃、さしもの山峡も開けて見渡す限りの平原に出た。ポプラの樹々が、今通って来た川の兩岸に並んで並木を造っている。指呼の間に目的地を見て隊列を整えるべく一時休止となる。特に命あり「乱れた服装は直す」ように言われる。

出発の命が下る。元氣回復の軽い足どりで第三大隊の兵士に迎えられて霊邱城に入城する。我々兵隊には分からないが数日駐屯するらしい。野営とは違い、夕闇迫る民家に落ち着いて内務班のごとき設営方法である。

る。

平時であれば民族特有の混成家族制度は相当数の住民が群居しているところ、今はぬけがらの空家ばかりで、おびただし住民たちは一体どこへ生活の場を移したのか。部隊は思うままに民家を利用することが出来る。数日、内務班同様の起居をする。馬は厩を設けて、すっかり落ちついている。

このへき地霊邱にも、珍しく若干の日本人居住者が軍と共にいるのか、こういう前線に軍人以外の同胞を見て、思いは微妙にゆれ動く。ちょうど三日目、慰問団がこの地を訪れ、一夜全隊員がはるばる遠来の同胞慰問に接し、楽しい野戦の一夜を過ごした。

ここに滞在の間、少しでも腹具合を回復させようと努力したが、結局は無駄で、いかに不慣れた土地での食養生が至難であるかと体験した。

旬日を経て、また敵の蠢動しゅんどうでもあったか、再び出動の命令が下る。朝から慌ただしく準備し、正午出発となる。富田伍長は健康上の理由で残った。

軍は南に向かって進軍、右方へ川を渡り、ちょっと

変わったコースをとる。両側はなだらかな丘で、所どころに土作りの民家が点在している。だんだん夕方に近く、道は険しく山肌を登る。しばらくすると激しく恐ろしい大雨が降って来た。急いで全員、雨具を着用したが、雨はバケツをひっくり返したようで、行軍の速度は鈍る。

今日のは出発から気持ちよく歩けたが、この雨は何を誘ったか体は途端に苦しく歩行は困難となり、衛生兵に申し出て隊列から少し遅れてついていく。上り坂が終わる頃、雨がやんだが、濡れた軍装は重い。向こうは上塞鎮分かり程なく到着した。

せんだって通過、休憩した小山の下に宿営の準備がされる。その間、衛生兵に伴われ、軍医の診断を受けに行く。検診の結果、はつきりと言わないが、しかし急きょ「後送」ということになり、その夜は野営して、翌朝三人の病人と共に用意されたロバの背に乗り、昨日来た道を引き返す。霊邱に着いて野戦病院に入院、治療を受けることになった。診断の結果、胸膜

炎の疑いということになり、病人生活に入る。幾らか体力も回復し、貨物自動車で荷物、人と共に大同の陸軍病院に搬送された。昭和十六年十月一日である。

それから体力回復のため絶対安静患者として、ベッドから下りない二カ月が続く。程なく十二月八日の日米開戦をその病床で知る。大分元氣になり、翌年「ろ病棟」から「い病棟」に移る。

昭和十七年三月二十六日、半年過ぎた大同陸軍病院から天津陸軍病院に搬送となり、病院列車で万里の長城を車窓に八達嶺下を通過して北支の広漠たる野を走り、北京の城壁を眺め、巨大なものだと思った。そして四月十七日に胸部疾患患者が養生する保養地である北戴河に搬送された。ここは万里の長城の東の起点、山海関に近い秦皇岛市の天津陸軍病院療養所のある所である。

ここ北戴河の療養方法は、一定の日課が厳しく行われ、食前、食後は必ず三十分間の安静時間が強制され煙草は厳禁である。入院してもずっと煙草は吸っていたので煙草を吸うのに随分苦勞をした。病室に煙草を

おくことは出来ないので、野外に散歩に出るとき裏山の松林の中に穴を掘って隠しておいて吸った。ところが煙草の補充が大変な苦勞である。幸い病院では働いている中国人苦力カワリから手に入れるわけである。生活の知恵である。

彼らも心得たもので、中国特有の綿の入ったぶくぶく服のどこかに隠して持ってきて、病棟廊下で行き交うとき「あるか」「ないか」尋ねて、もちろん定価より高い値段で素早く買うのである。

こうした療養生活を送ること二カ月、六月十九日に再び天津陸軍病院に搬送された。程なく七月の初め、わが人生で体験した最高の暑さに遭遇した。病室内の寢床は敷布が焼きつくように暑くて寝ておれず、外に出て涼しい所を探してもない。木の蔭へ入っても駄目。一時は胸が苦しく息が詰まりそうであった。ほんとうに暑かった。

暑い夏も少し柔になった。八月一日、とうとう内地へ帰還することになる。

昭和十七年八月一日、塘沽港を病院船で出航する。

出航して波の上を静かに船が走るが、来る日も来る日も船端に砕ける白波が続き、玄界灘を走るときはサメが並泳していた。

八月七日夕刻、関門海峡を通り瀬戸内海を航行して大阪港に入港、国防婦人会、愛国婦人会など大勢の方々の出迎えをうけて天王寺の大阪日赤病院に入った。生還を予期せぬ内地に感ひとしおであった。落ち着いて軍事郵便で田舎に知らせると、父が早々に見舞いに来てくれた。

昭和十七年九月十六日、原隊の隣にある岐阜陸軍病院に搬送された。同年十二月二十日現役免除、退院、除隊、予備役編入となったが、昭和十九年五月十一日、臨時召集されることになる。

## 我が主計戦記

山梨県 守屋 高德

昭和十七（一九四二）年一月、経理部見習士官として江戸城田安門を通り第七中隊橋本隊に至る。連隊長鵜飼大佐、河田旅団長、近衛師団長豊島中将、連隊は明治七（一八七四）年軍旗拝受。皇太子隊付二代「日嗣の皇子の畏しこくも 在せし誉れいや高く……」と連隊歌にある。現在の武道館の場所は、将校集会所で明治建築の粹、赤れんが石造り、銅うろこ葺きの近衛師団本部がある。文化財として現存する。

連隊本部前に大理石の御立台があり、皇太子（現天皇八歳）が御立ちあそばす。教練、乗馬等過密で日のたつのも忘れるくらい、一日も早い教育期間の終了を待つ。同年三月末、陸軍主計中尉に昇任、従七位に叙され、経理学校に分遣を命ぜられる。

経理学校の履修科目はやたらと多く、寝ずに読んで